

書 評

黒田悦子著

『スペインの民俗文化』

梶田純子[※]

世界中にスペインが注目された1992年が終わった。悲願であったバルセロナでのオリンピック開催、セビーリャでの万国博覧会、コロンブスのアメリカ大陸発見五百年記念、そしてレコンキスタが終結して五百年と華々しい事柄が並ぶわけで、スペインのみならず、世界中がお祭騒ぎに巻き込まれたかの感が拭えなかったのだが、本当のところこれらがスペインにとってどういう意味があったのかを考えることが必要であろう。

この本の著者も述べているように、スペインの近年の半世紀が激動の時代であったことは周知の事実である。フランコ死後の民主化が、1982年の社会労働党の政権樹立、1986年のEC加入と表面的には進んでいるが、その一方では急激なインフレをもたらし、国内企業の不振とあまり喜ばしくない経済状況の中で「イベント」に期待をかけたのもわからないわけではない。しかし、その一つ一つをよく見てみると、もっと大きな秘密が隠されているのがわかる。バルセロナでのオリンピック、これは1936年に開かれるはずであった「幻のオリンピック」の実現である。英語、フランス語、スペイン語（カスティーリャ語）の他に、カタルーニャ語の使用が認められたこと。これはカタルーニャの人びとにとってまたその他の地域の人びとにとっても“地域意識”を煽られたことであろう。また、万国博覧会がセビーリャで開かれたこと、これも考えるに値する。本書の四章を読むと、セビーリャにおける「フェア」和「万国博覧会」がダブって見えるのである。もちろんイベントとしての両者の性格は異なるが、それを開催したのがセビーリャであるということが一つの意味を持つのである。そのように常に地域性が問題になるスペインだが、それは、スペイン内戦が

※関西外国語大学外国語学部講師

一つの歴史的事実になってきているのではないであろうか。その結果、スペイン国内での自治政治の実現、カタルーニャ語をはじめとする地方語を公用語と認めたこと、それによってスペインに、「地方の時代」が到来したのであろう。地方という用語もあるだろうが、社会・文化における地域性の特徴が前面に出てきているというわけである。そういうこともあって本書の登場は大いに時宜を得たというべきものである。スペインの政治・経済を論じた書物は数多くあるが、スペインの地域性を意識して民俗・文化を論じたものはまだあまりない。しかも多種多様なスペインの民俗・文化を地域的にまたある時には鳥瞰図的に見ているのも、長年社会人類学的フィールドワークに基づいた著者の力量であろう。

ここで敢えて「民俗・文化」と分けて書いたのには理由がある。それは、黒田氏がタイトルにもつけられている「民俗文化」という語へのこだわりからである。「普通の人びとの文化」ということでは通常、「民衆文化」を思い浮かぶわけだが、ここで述べられるスペインの民衆の文化には、支配階級へのアンチテーゼとしての存在する力が欠けていると著者は言う。その風化した民衆の文化が、「民俗文化」であると定義する。

近年のスペインの地域的社会的運動の高揚の影で、民衆の文化はどんどん形を変えつつある。この社会的激動期に、変わりゆく民俗文化を見聞し、考察していったのが本書である。しかも、今まで社会人類学者が取り上げなかった町や都市における民俗文化を敢えて選んだのは、人口の半分以上が都市に居住していることと、田舎にも「都市性」が偏在しているからだと言う。事実、スペインの外見上の都市構造は町も村も変わりはない。それぞれの「場」の役割もほぼ同じと言えよう。ただ規模の大小の違いである。地方のある小都市における生活と祝祭の「都市性」を「ピカレスク」（悪漢性）と「民衆文化」という視点で著者は見ている。「ピカレスク」とは悪ぶった語り口で現実を露にし、真の名誉ある生き方とは何かにこだわっていることで、町の間人間関係を考える助けと

なる。ここでミハイール・バフチンの「民衆文化」を町の生活空間と祝祭を考えるモデルにし、バフチンのいうカーニバルの宇宙観が時代と共に消えゆく過程をスペインの祝祭の中に見ようと、歴史的区分の中で特にスペインのバロック時代の祝祭に注目して、その意味と変化を、事例にあわせて分析している。

さて、本書は第一章から第八章までを三つに分け、Ⅰで、民俗文化を考えるためにその主役である庶民の定義付けと生活を記録し、また生活空間と饗宴の場の変化を見て社会変化を考え、Ⅱで町の祝祭暦の中で特にバロック時代に重要な「聖週間」「フェリア」「カーニバル」などの祝祭史と事例を、次のⅢで二人の研究家の業績に繋ぐための分析を行ない、Ⅳでスペイン民俗文化を記録、研究、分析した代表的な二人の人物、ジュリアン・ピット＝リヴァースとフリオ・カロ・バローハを紹介している。

序章で、この本の意図、まとめのようなものが著者自身によって記されているが、中世・ルネサンス期に勢いづいた「民衆文化」に対して、スペインの文化、特に宗教・祝祭面においては、バロック期が歴史的にみて重要であった。著者が引用しているとおり、「バロックは対抗宗教改革運動の芸術としてローマとスペインから波及した様式で、ヨーロッパに与えた影響はルネサンスより、ずっと深く、行き渡った」ものである。「その無原罪のマリアとキリストの受難を強調する芸術スタイルの偏在性」とスペインにおけるマリア信仰が16世紀末にキリストの受難への信仰にとってかわられ、19世紀に再びマリア信仰が上昇するまでの中間にある17世紀、18世紀の中心的宗教シンボルが、受難のキリストとマリア（特に無原罪と孤独のマリアが多い）であるとしたら、これらの象徴を中心にして展開される四旬節と聖週間がバロック時代の主祝祭になるのは当然であろう。しかし、現在の祝祭では著者のフィールドであるラ・モレーナの町の祝祭暦を見ても、聖週間は大々的に催されるのに対し、四旬節は顔を出さない。

また中世に盛んであったらしいカーニバルも、

17世紀のバレンシアでは無原罪のマリアの重要性を訴える祭には、バロック風の山車は雰囲気にとぐわないとされたが、マドリードやバルセロナでは1936年のフランコ政権によるカーニバル禁止令まで華やかに催されていた。ただし、カーニバルが廃れたのは、その禁止令だけではなく、1960年代の経済発展も大きく関係し、人びとの関心が他の娯楽へと移ったためであろうと言う。さらに現在のカーニバルについて著者は報告しているが、フランコの死後に共同体の祝祭と地方のフォークロアを保存しようとする流れが、カーニバルの復興へ効果があるとは簡単にいえないとしているのだが、現在のカーニバルは本来の力を失い、単なる普通の祭りになってしまっている。

カーニバルについては著者も記述は難しいと述べているが、フリオ・カロ・バローハの研究を意識したうえで、あえてそれをモデルにして、事例とを比較した著者のカーニバル論、現在のカーニバルをフィエスタと呼ぶ方がいいのではないかという意見にはもはや民衆文化が単なる民俗文化に変容してしまったと、著者は言いたいのであろう。

ところどころに見え隠れするのは、著者の中南米の祭りとの比較である。もちろんその原型をスペインに見ようとする点、また現在の両者の祭りの相違点は興味深いものがある。既にスペインで失われた祭の形態が時には土着の祭りと交ざりあって息づいているというのである。その変容したカーニバルもまた一つのカーニバル的祭りとして、著者でなくとも興味をそそられる。

またヨーロッパの中世・ルネサンス期とそれ以後の民衆文化に特徴的であった「フェリア」（定期市）が姿を消し、あるいは形態を変えてしまって存在すると著者は言う。現在のラ・モレーナのフェリアをセビーリヤの模範例、メディーナ・デル・カンボの失敗例と比較して報告しているが、ここにも民衆文化が民俗文化あるいは大衆文化となった例を見ることができる。ここで著者は何も言及していないが、南米の農牧業国で現在“Exposición rural”として、存在する農業・牧畜業の見本市がフェリアに源を発したものではな

いかと私は感じている。この見本市は単に農機具などの展示、牛、馬などの品評会、競り市だけでなく、その国の人びとの娯楽施設としての役割も担い、国家指導者も必ず訪れるほど重要なものである。それが経済的に大事であるというばかりでなく、庶民にとって無視できぬ存在であるのは、「祭り」的要素がそこにあるからではないかと思う。最後にこの本に対する感想として、著者が調査し、十ヵ月住んだエストレマドゥーラの町を中心に、隣接するアンダルシア、そして若干の地中海地域、バレンシア、バルセローナの事例の比較がなされているわけで、スペイン全土に渡る比較が欲しいところである。また本書をきっかけに、今後の氏の他地域での研究調査が進むことを望まれるところである。

B6 判292頁 平凡社 1992.

綾部恒雄著

『東南アジアの論理と心性』

吉松久美子*

はじめに

東南アジアとは世界地図上に確かに存在しているながら、その定義を容易に受けつけない非常に複雑で多様性にとむ世界である。本書は文化人類学者の著者が、その東南アジアを一つのまとまりある世界として、そこに暮らすひとびとの論理と心性を描き出そうと試みている。そして、その試みが成功しているのは、三十六年にわたる研究歴から導かれた独創的な視点によるところが大きい。本書は選抜された十九篇の論文から構成されている。

目次

第一章 “はざま文化”の東南アジア

1. 東南アジア小史
2. 東南アジア社会の地域性

※大東文化大学講師

3. 東南アジアの宗教
 4. 東南アジアの食
- 第二章 神話と世界観
1. タイの宗教民話
 2. 穀霊観念の諸相
 3. 民族複合と世界観
 4. 日本神話と東南アジア神話
- 第三章 東南アジア社会の論理
1. ラオ族農民の生活
 2. ラオ人の個人史
 3. タイ国社会のしくみ
 4. ヴェトナム人親族組織の原型
 5. トンキン地方の父系親族
 6. バリ社会の構造
 7. タイ文化の「サヌック」志向
- 第四章 人間認識・倫理・教育
1. タイ人の人間認識
 2. テラヴァダ仏教の倫理と女性
 3. タイ国の教育とデック・ワット
 4. 東南アジアの大学と社会

東南アジアとは何か

第一章「“はざま文化”の東南アジア」は、東南アジアをインド文明や中国文明の亜流としてではなく、独自性をもつ“はざま文化”として考察することを目的としている。第一節「東南アジア小史」では、稲作を生業とする先史時代から、民族の移動拡散、中国文明の影響、インド文明の浸透、イスラムの進出、西欧文明の洗礼、と基層文化が形成された歴史を、大陸部東半分（ヴェトナム、カンボジア、ラオス）、西半分（タイ、ビルマ）と島嶼部（マレーシア、インドネシア、フィリピン、シンガポール、ブルネイ）に分け、それぞれ簡潔に描き出している。

第二節の「東南アジア社会の地域性」では、この章の主要課題である「東南アジアとは何か」という重要な問いかけがなされている。つまり、東南アジアを東南アジアたらしめているものは何か、という問いである。近年、一般的関心が高まるなかで「東南アジア」という呼称が頻繁に用い